

ヨシでびわ湖を守る ネットワーク通信

14

VOL.



びわ湖環境ビジネスメッセ2012

～ヨシでびわ湖を守るネットワークの展示のようす～

10月24日から3日間滋賀県立長浜ドームで「びわ湖環境ビジネスメッセ」が開催されました。ヨシでびわ湖を守るネットワークもココヨ工業滋賀のブース内で展示を行ない多くのお客様に活動実績を紹介させていただきました。また、たくさんのメンバー企業、団体様にご来店いただき有難うございました。共感の輪は徐々に広がり、期間中新たな賛同者さまも増え**現在84社**のメンバーに拡大しております。これからもみなさまとの繋がりを大切に、地域社会への貢献とヨシ活用がすすめていければと考えています。

びわ湖を知る ■ 問題

びわ湖の平均水深は何mでしょうか？

- ① 51m
- ② 41m
- ③ 32m
- ④ 48m

特集 1ページ

滋賀県立琵琶湖博物館 学芸員
澤邊 久美子 様より

草むらで暮らすカヤネズミ

【日本一小さなネズミ、カヤネズミ】

カヤネズミとは、ススキなどの背の高い草むらに棲み、草の上を歩いて移動します。そして、草の葉を細く裂いて、それをきれいに編み、丸い巣を作って子育て、休息に使います。草の上を歩けるほど小さく軽いネズミです。大きさは約6cm、重さは500円玉と同じくらいです。カヤネズミは、草むらでの生活に特化し、草むらがないと生きていけない変わった生態を持つネズミです。日本では、宮城県、新潟県から鹿児島県にまで、海外にはイギリスからロシア、中国、台湾などにも分布しています。

草むらで生活するために、小ささのほかにその体にも特徴があります。不安定な草の上を尻尾を巻きつけてバランスよく歩くため、体より長い尻尾をしています。また、後ろ足は親指と小指でしっかり葉や茎をつかめるような形をしています。草の葉で切れないよう、耳は小さく毛で覆われています。他のネズミとの競争を避けるため、草の上という特殊な環境へ体を適応させてきたのです。

このように草地という環境に適応した生物は鳥類、昆虫類にも多く、草地環境では多様な生態系が形成されています。

【身近にいたカヤネズミ】

“カヤネズミ”という名前の通り、カヤと総称されるススキやオギ等の「茅原」に多く生息していました。特に日本では古くから、かやぶき屋根の材料や家畜の飼料としての草を育てていた「茅場」では身近な存在であったと考えられます。かやぶき屋根は地域によってススキやヨシ、ワラなど様々なカヤを使い、毎年1回刈り取りし、草を収穫して使われていました。



『カヤネズミ』



『カヤネズミの巣』

特集 2ページ

刈ることかやは次の年に新しい芽を出し、質の良いかやが育ちます。刈り取りをせず、管理放棄すると草地は遷移が進み森林へと変化してしまいます。茅場は人の手が入ることによって維持されてきた特殊な環境なのです。しかし、現在では、かやぶき屋根は減り、かやの需要がなくなり茅場も姿を消しつつあります。茅場だけでなく草地の価値が低下したことで草地面積は急激に減少し、それとともにかやネズミも数を減らしています。現在では滋賀県でも希少種に指定されています。かやネズミに限らず、草地を主な生活の場としてきた生き物たち、昔ごく身近にいた生き物たちが数を減らしているのです。手をつけず保護するだけではなく、人の適度な関わりによって維持される環境に対しては、管理放棄による衰退を食い止める保全が必要となります。



『茅場』



『ヨシ原のネズミを狙うチュウヒ』

【琵琶湖環境とのつながり】

かやネズミは、茅場だけでなく多様な草むらに住み家にしています。滋賀県では湖岸に多いヨシ原もその一つです。ただ、ヨシはススキに比べて葉が短く固いため、巣を編むには少し難しいのか、巣材としては多い方ではありません。しかし、ヨシ刈りの際かやネズミの巣が見つかることもあります。滋賀県ではヨシは古くから貴重な資源として利用されてきました。人の手入れにより維持されてきたヨシ原もまたかやネズミとともに多様な生態系が育まれています。また、田んぼのイネにも巣を作ります。稲刈りをする少し前、田んぼから水を引いたとき、田んぼに入ってきて巣をつくり子育てをして稲刈りのころには出ていきます。北陸地域では、イネにできたかやネズミの巣を豊作の印としていところもあります。滋賀県では、山間部の水田に多く巣が見つかります。このようにかやネズミにも巣材にはこだわりがあるようです。現代では価値の低下した草地ですが、昔から人の関わりの中で暮らしてきた身近な生物が作り出す生態系を壊さないためにも、何らかの形で人の関わりを持続的に行ない草地環境を維持していくこと、さらに草地利用の文化そのものを継承していくことが大切であるといえます。改めて草地の価値を考え、新しい関わり方を探求していきたいと思ひます。



『かやぶき屋根の屋根材（ススキ）』



『かやぶき職人による
かやぶき屋根のふき替え』



『かやぶき民家』

ネットワーク 広場

オーパルオプテックス(株)
中岡 靖雄さまより



オプテックスグループの社会貢献活動

日本最大の湖である琵琶湖畔に本社を置くオプテックスグループは、企業経営の一使命として社会貢献活動を位置付け、子会社オーパルオプテックス(株)の施設を拠点に、2002年より本格的に「琵琶湖体験学習など支援活動」を展開しています。

本事業は、四季を通じて様々な景観を見せる琵琶湖畔に位置する当社が、その立地環境を生かして子どもたちに、琵琶湖畔での体験学習の機会の提供と活動支援を目的に実施しております。



カヌー体験



ドラゴンボート体験



ヨシ紙笛づくり

活動内容は、水環境体験学習(湖畔の生き物しらべ、ヨシ紙を使った笛づくり、湖畔の水環境しらべ、外来魚しらべ)とスポーツ体験学習(カヌー、ヨット、ドラゴンボート、いかだづくり)などの多様な活動を展開しています。特に、学校の教科学習(理科・社会・体育など)、宿泊体験学習、修学旅行、校外学習などで、当教育施設での活動支援をし、子どもたちに心を揺さぶる感動体験を提供しています。

この3年間では、およそ4万人が「学ぶ意欲を高め、たくましい体をつくり、自然と共生する確かな環境観」を身に付け、「生きる力」をより一層育む機会としてくれています。



プランクトン観察



ヨシ植え体験



外来魚しらべ

みんなの リエデン

② 41m

南湖平均水深約4m
北湖平均水深約43mだそうです。

ヨシの出前授業～ヨシを使った笛づくりへ

コクヨ工業滋賀では、小中学校を中心にヨシの大切さを伝える出前授業を行なっています。

これまでに県内を中心に多くの学校へ出向き子どもたちにびわ湖環境の変化やヨシが減少している現状、ヨシ原を守っていくことがびわ湖にとって大切であることを伝えてきました。

その中で、草津市にあるS小学校では出前授業の後、学習の繋がりの中で、後日、校外学習としてオーパルオプテックスさんでの水環境体験学習の「ヨシ紙を使った笛づくり」に取組まれました。

子どもたちにとって、教室で知識を学び、校外でのヨシ紙工作を体験することで、よりヨシが身近なものとなり有意義な学習となったことでしょう。



【ヨシ紙を使った取組み】 ～オーパルオプテックス(株) 中岡さまからの一言～

2012年よりコクヨ工業滋賀様のご協力を得て、「ヨシ紙を使った笛づくり」の学習を開始することができました。当社のわがままな要望にお応えいただいたこと、この場を借りてお礼申し上げます。

以前はヨシそのものを材料にヨシ笛を作成していましたが、品質のバラつきや供給量不足などの様々な問題に直面していました。特に笛づくりのためのヨシは内径10mm以上の太さが必要となりますが、この太さを持つヨシはそう簡単に入手できません。入手できたとしても、ヨシの根に近い部分しか使えない、つまり穂先に近い部分が廃棄になってしまうという問題がありました。ヨシ紙に材料変更したことでヨシのほとんどの部分が使えるようになり、より多くのヨシを有効活用することが可能となりました。

「ヨシ紙を使った笛づくり」は約2,500人の子どもたちが体験してくれました。まだまだ改善すべき点も残っていますが、この学習を通して、ヨシの大切さやびわ湖の良さを知り、郷土を大切にすることが増えることを願っております。

